

<b>Title</b>	関西の沖縄出身者社会と芸能：両大戦間期を中心に
<b>Author</b>	栗山, 新也
<b>Citation</b>	市大社会学. 9 卷, p.57-72.
<b>Issue Date</b>	2008-03
<b>ISSN</b>	1345-8019
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学社会学研究会
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

# 関西の沖縄出身者社会と芸能

——両大戦間期を中心に——

栗山新也

## 1 問題設定

昭和14(1939)年から昭和18(1943)年ごろにかけて日劇は「日本の民族郷土舞踊」に材料を求めた舞台を数多く上演した。その現地取材の中心人物であった佐谷功は、昭和14年に沖縄本島、15(1940)年に八重山諸島を訪れたが、昭和18年出版の『日本民族舞踊の研究』のなかで、大阪商船の沖縄航路での見聞を次のように書いている<sup>1)</sup>。

沖縄へ行く船の中で、私達は屢々、どこか哀愁を帯びたなつかしい蛇皮線のしらべを聞く。故郷をはなれて遠く異郷に出る旅客が、持参の蛇皮線を奏でて歌ひ、且、踊つてゐるのである。

船中から歌や踊りに明け暮れているように見えることからわかるが、戦前の海外移民や本土出稼ぎなど沖縄からの流出者たちは、その移動先に芸能を帯同した。彼/彼女らにとってそれは、受け入れ社会でエスニシティを維持・表出するための象徴的な身体実践になっていった。もっとも、そうしたエスニック文化の普及・発展は、それを支えるエスニック社会の政治経済的文脈のなかで捉えられる必要がある。

本稿の目的は、両大戦間期の関西圏において①沖縄出身者社会の動向が、それを基盤にして営まれた芸能活動にどう反映したか、②周辺住民(在地の人びと)や沖縄出身者自身は、その芸能活動にどのようなまなごしを向けたか検討することである。対象の時期ならびに地域を両大戦間期の関西圏に置いているのは次のような理由からである。①1920年代以降、沖縄からの出稼ぎが最も集中した地域であるがゆえに、フィッシャーの言う下位文化の強化・普及のための人口臨界量を超えていたと考えられること<sup>2)</sup>、②大阪市の人口は、1925年に211万人に達し、以後1932年まで日本最大の都市であったため、下位文化間の衝突が顕著にみられると考えられること、である。

本稿の構成は次のとおりである。次節では、沖縄出身者の定住・生活過程を①出稼ぎのはじまり、②集住地域の形成と県人会の設立、③集住地域の拡大と生活改善運動の順に明らかにする。第三節では、大阪への出稼ぎが本格化する1920年代から終戦前の1940年代初めにかけて展開された沖縄出身者の芸能活動を明らかにする。これらを踏まえて第四節では、沖

縄出身者社会の動向と、沖縄出身者たちの芸能の営みとのかかわりを検討し、さらにその営みが、内側あるいは外側からどのように捉えられ、評価されたかを考察する。

## 2 出稼ぎと集住地域の形成

### 2.1 出稼ぎのはじまり

沖縄から本土への出稼ぎのはじまりの時期についての記述は、『雄飛—大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会 50周年記念誌』<sup>3)</sup>、『沖縄県史第7巻 移民』所収の安仁屋政昭「県外移民と県内移住」<sup>4)</sup>などにみえるが、ともに明治30年代とされている。当時の『琉球新報』から本土出稼ぎの記録を拾ってみよう。古いものでは、1900年5月9日付に「大阪鉄工所の職工募集」の記事がみえ、同年7月1日付に「体格検査を行ひしに合格せしもの三十余名にして孰れも近日入港の琉球丸より大阪へ向け出発せしなる筈なり」とある。ところが、このうちの24名が入所まもなく逃亡し、残留したのは9名であったと同年7月21日付は報じている。また1906年2月9日付には、昨年12月に長崎の口之津築港から人夫の募集があり日給70銭で420名余りが契約したとある。しかし就労先は三池築港に変更され、さらに日給が20銭余りであったため、過半数はあらたに職を求めて福岡などへ赴き、そのうち21人は衣類や携帯品を売って旅費を稼ぎ、鹿児島にたどり着いたという。本土出稼ぎの黎明期は、本土での身寄りもないなかで、こうしたケースが跡を絶たなかったとみられる。

沖縄から本土への出稼ぎが本格化するのは1920年代である。当時の沖縄は、第一次世界大戦後の不況から世界大恐慌に至る慢性的不況下で、極度の窮迫状態にあった。その大きな原因は、世界的な砂糖需要構造の変化による砂糖価格の暴落で、黒糖生産に偏っていた沖縄経済が大打撃を受けたことである。とりわけ、慢性的な不況が本土や沖縄の農村部にまで及んでいたため農村需要に依存していた黒糖市場が収縮したこと、沖縄の農民が本土農民以上に商品経済に包括されていた——すなわち家計支出に占める現金化率がかなり高かった——ため経済変動の影響を受けやすかったことなどが原因であるといわれる（向井1992：199-202）。表1は、富永斉による各地区人口一人当たり所得の推計である。これによれば、1920年から1930年にかけて、とくに本島農村地域の島尻郡、中頭郡、国頭郡で一人当たり所得がほぼ半減しており、砂糖価格暴落の衝撃が大きかったとみられる。

1920年代以降の本土出稼ぎは、職種が工業に集中し、阪神・中京・京浜の工業地帯が主要な出先地であること、短期出稼ぎの若年労働者が主流であること、女性の占める比率が高く、その大部分が製紙・紡績の工業に吸収されたことなどが言われているが<sup>5)</sup>、その特質をもう少し詳しくみよう。表2は、1926年現在の地区別にみた出稼ぎ流出者数である。これによれば、先に挙げた島尻郡、中頭郡、国頭郡などからの流出者が多く、とりわけ国頭郡では全人口のうちの一割が流出している。次に図1をみよう。これは1920年から1940年にか

表1 沖縄の地区別所得

	1920年				1930年			
	所得 (万円)	人口 (百人)	一人当り 所得(円)	相対所得 (%)	所得 (万円)	人口 (百人)	一人当り 所得(円)	相対所得 (%)
那覇・首里区	1,058	767	138	129	890	807	110	162
島尻郡	1,662	1,514	110	103	985	1,513	65	96
中頭郡	1,428	1,468	97	91	858	1,436	60	88
国頭郡	1,223	1,115	110	103	586	1,071	55	81
宮古郡	447	531	84	79	407	614	66	97
八重山郡	315	321	98	92	197	335	59	87
合計	6,133	5,716	—	—	3,923	5,776	—	—

(富永 1995: 64)より1920年、1930年のデータを転用。合計は筆者が加えた  
相対所得=一人当り所得の平均(1920年=107円、1930年=68円)に対する割合

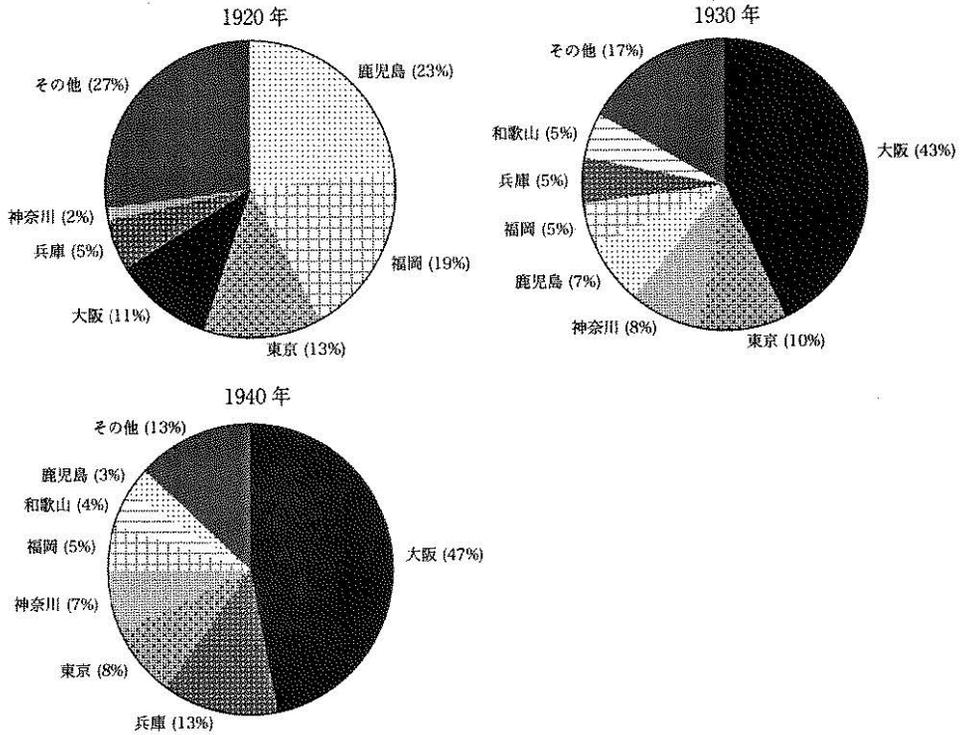
表2 地区別にみた出稼ぎ流出者数

	現在人口	現在出稼ぎ者数	人口ニ対スル出稼者率
那覇市	50,575	1,804	0,036
首里市	31,241	1,406	0,066
島尻郡	141,068	8,146	0,058
中頭郡	145,555	7,477	0,051
国頭郡	103,311	12,341	0,119
宮古郡	56,238	440	0,008
八重山郡	33,549	525	0,014
合計	551,535	32,139	0,058

1926年現在、沖縄警察部保安課  
「出稼者数調(外国を除く)」(福地編 1985: 37)

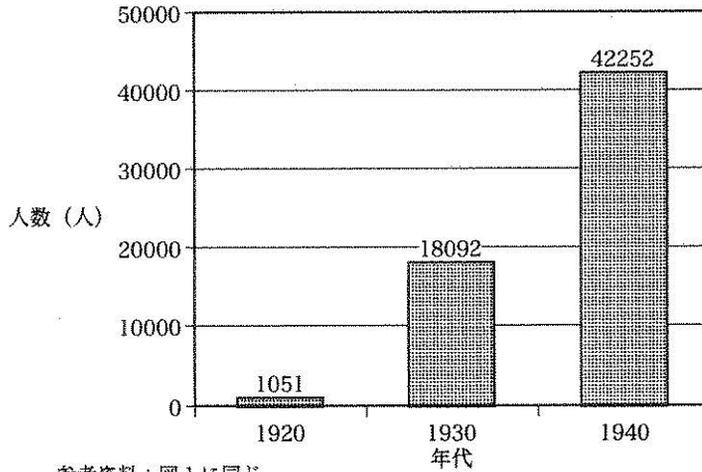
けて他府県に在住した沖縄出身者人口の割合である。これをみると、1920年までは九州に多かったが、1920年から1930年にかけて大阪の割合が高まり、1930年時点で全体の4割以上を占めている。そして1940年には、大阪・兵庫で全体の6割にまで達している。つまり、出稼ぎが本格化した1920年代以降、本土への流出口は大阪へ集中したのである。図2で在阪沖縄出身者数の推移をみると、1920年から1930年にかけて1千人から1万8千人にまで増加し、さらに1940年になると4万人以上にも膨張している。

1920年代から1930年代にかけての大阪の労働市場は、雑工業を主体とする零細規模工



「沖縄出稼者の居住地別本土現在人口」(向井 1990: 170)

図1 他府県在住沖縄出身者の割合



参考資料：図1に同じ

図2 在阪沖縄出身者数の推移

業、機械を主体とする大規模工業が拡大し、軽工業から重工業へシフトしつつあった。こうした展開のなかで停滞した紡績業では、朝鮮人、沖縄出身者、被差別部落民などの低賃金労働者の集中雇用によって合理化を図った会社・工場がいくつか存在していたという（富山 1990：113-125）。このような大阪の労働市場の特質により、沖縄出身の女性の多くは紡績工業に、男性は日雇労働と紡績、その他の零細工業に就労した。

## 2.2 集住地域の形成と県人会の設立

こうした沖縄出身者の積極的導入の背景には、朝鮮や被差別部落民に対する差別意識と共通したものが存在しており（富山 1990：130）、沖縄出身者たちは差別的な労務管理と蔑視によって迎えられた。富山一郎によれば、当時沖縄出身者たちの集中的雇用をはかった富士ガス紡大阪工場、東洋紡三軒屋工場、福島紡堺工場、倉敷紡枚方工場、岸和田紡堺工場、近江絹糸紡は、他の在大阪紡績工場にくらべて賃金水準が低かったという（富山 1990：126-130）。また、金子マーティンの聞き取り調査によれば、岸和田紡では「寄宿舍の二階は朝鮮、沖縄の人の部屋のみで、食堂で坐る場所も風呂も別」であり、「朝鮮、沖縄の人は主に『労働最も激しき』といわれた粗紡部で働いていた」（金子 1984：57-58）。その他、福地曠昭の『沖縄女工哀史』に取められた紡績女工の体験談には、罵倒を浴びせられたり、蔑称で呼ばれたりするなどの嫌がらせの実態が証言されている<sup>6)</sup>。当時の大阪の労働市場は、こうした差別の構造によって支えられたのである。

さて、出稼ぎ者にとって重要なのは居住場所の確保と雇用機会の獲得であった。そのため、同郷人のつながりを頼りに押しかける者が多く、それが単身者の滞留を保障することによって、沖縄出身者の集住地域が形成された（富山 1990：141-145）。後述する「関西沖縄県人会」の中心メンバーであった浦崎康華の回想によると、1920年代には、港区市岡町、大正区三軒屋町、恩加島町、小林町、此花区四貫島、春日出町、伝法町、高見町、西成区今宮町、東成区鯉江町今福、蒲生などに「沖縄村」とよばれる集住地域が形成されたという（浦崎 1977：100）。また1920年代後半から1930年代にかけて、同郷の会が相次いで組織されていく。

一方、こうした同郷的なつながりとは別に、沖縄出身労働者の地位向上のため、自覚的に組織された集団「関西沖縄県人会」が1924年2月に設立される<sup>7)</sup>。この県人会は、本部と支部に分かれて組織された。本部は、マルクス・レーニン主義を奉ずる赤琉会のメンバーを中心に構成され、そのなかには1920年代以前に来阪した高学歴のエリート層も含まれていた。また支部は「同一地域に三〇名以上会員があるとき」<sup>8)</sup>に組織され、港区第一支部、鯉江支部、石田町支部、岸和田支部、大和田支部、堺支部、稗島支部、北大阪支部の8つが存在した。一般会員の数は「千数百」<sup>9)</sup>に及んだという。

県人会の活動はおもに職業紹介や宿泊場所の提供などの福利的活動や、労災保障交渉などの労働組合的活動であったが、労働組合的な活動はやがて沖縄出身者に対する差別への抗議活動を中心とする社会運動へと移行した（富山 1990：160-165）。

また他方で関西沖縄県人会の指導者たちは、差別からの脱出のため一般労働者たちに優秀な労働者になることを希求した。ところが指導者たちにとって、差別からの脱出の基準となる優秀さは、「沖縄人」と「日本人」という対の概念で測定され、その結果、優秀な労働者になることは、「沖縄人」を払拭し「日本人」になることと了承されてしまい、集住地域における「沖縄習俗」の矯正が唱えられた（富山 1990：184）。たとえば、関西沖縄県人会の機関紙『同胞』第9号（1926年3月15日）をみると、「他の誤解を招く可き行為」として「方言使用、琉装放歌、毛遊び（岸和田春木のみ）」などが挙げられ、「吾々同胞の向上発展の為に飽までも誠めなければならぬと思ふ」とされている。

しかしこの県人会はのちに、1928年に田中義一内閣の下ではじめて日本共産党や労農党を中心とする社会主義者が全国一斉に弾圧された三・一五事件、またその翌年、強化された治安維持法適用により日本共産党員などが大量に検挙された四・一六事件の両弾圧によって、社会主義運動にまで活動を発展させていた中心メンバーを失い、1920年代末には活動の一時停止を余儀なくされた（富山 1990：165）。

### 2.3 集住地域の拡大と生活改善

1930年代になると、大阪の労働市場では重化学工業部門が急激に拡大し、それとともに賃金も上昇するが、紡績、日雇などの部門は低賃金のままで低迷していた。このような展開のなかで、日雇などに限られていた男子の沖縄出身者の雇用先もしだいに拡大する（富山 1990：199）。こうした重化学工業部門への進出は、沖縄出身者の定住化を促し、集住地域が飛躍的に拡大する。

表3は1935年発刊の『関西沖縄興信名鑑』に収録された「関西在住県人職業分布状況総覧」から地区別の沖縄出身者居住数と世帯数の推計をみたものである。これによれば、大正区への人口集中が最も顕著である。『大正区史』<sup>10)</sup>によれば、大正区には、明治の中頃から大阪紡績、藤永田造船所などの造船工場、煉瓦製造工場が次々と建設された。大正期に入ると運河の開鑿が盛んにおこなわれ、1923年に大正運河が完成すると、そこを中心に広範な木材街が形成された。堀田暁生によれば、大正運河の付近には貯木池が多数作られ、貯木や製材に従事することが多かった沖縄出身者は、その近くに集住したという（堀田 2002：61）。また前掲「関西在住県人職業分布状況総覧」によれば、沖縄出身者は北恩加島町を中心に居住し、鉄工所、製材所、煉瓦工場などに従事していたとされている。なお大正区には、朝鮮人も集まり住んでいた。水内俊雄によれば、「沖縄出身者が主に居住する北恩加島町よりは、大正運河ぞいおよびその南の小林町、そして木津川運河より南にある船町に朝鮮人は集住した」（水内編 2000：43）。

また1930年代には、大阪の労働市場にあふれた沖縄出身者によって、尼崎方面においても集住地域の形成がはじまる。沖縄県人会兵庫本部の記念誌『ここに樹格あり 沖縄県人会兵庫本部35年史』によれば、尼崎戸ノ内への沖縄出身者の移住は、昭和5、6（1930、

表3 地区別にみた沖縄出身者数と世帯数

地域	居住者数(人)	世帯数(戸)
大正区	6,500	850
西成区	6,000	800
西淀川区	3,000	350
東淀川区	3,700	450
港区	3,500	400
此花区	1,500~1,600	200
北区	2,500	300
住吉区・東区・西区 南区・浪速区・東成区	1,400~1,500	200
堺市	2,000	250
泉南郡	2,000	200
和歌山	3,500	350*
兵庫	3,000	400
京都	1,000	50
その他	1,500	200

関西沖縄興信社による推計、『関西在住県人職業分布状況総覧』『関西沖縄興信名鑑』1935:16-18  
\* 本文には「三千五十戸」とあるが三百五十の誤りだとおもわれる

1931) 年ごろ、大阪の西成で米屋をしていた本部出身が養鶏をはじめ本部出身者があつまって小さな集落をつくり、一方で「素灰焼」や「から消し」作りを生業としていた中頭や崎本部出身者が周辺住民の苦情により引っ越してきたことがはじまりであるという。戸の内親友会ができた昭和12(1937)年ごろには沖縄出身者も増加し、他府県出身者も入り込んで渾然としていたという(沖縄県人会兵庫県本部 1982:55-57)。

中高松の集住地域は、大阪や堺、和歌山の労働市場からあふれ、武庫川堤防の第四時工事の飯場跡に住んでいた沖縄出身者たちが、兵庫県からの立ち退き命令を受けて移り住んだのがはじまりだとされる。当初は農業や養鶏などの畜産が中心であったが、しだいに工場勤めや日雇いなども多くなり、養豚も盛んになったという(沖縄県人会兵庫県本部 1982:59-62)。当時の沖縄出身者の機関紙『大阪球陽新報』3号(1937年9月1日)は、中高松の集住地域の様子を次のように報じている。

松林の中に見田舎山原の山ヤードイを思はせるやうな茅葺の家が七、八十軒も密集してゐる。こゝは兵庫武庫郡良元村字蔵人中高松といふ所で、こゝに我々と県を同じうする同胞が三百人も生活してゐるのである…時もあるうに真昼間に三味線や太鼓でドンチャン騒ぐ音が聞こえてくる。聞けば今日は旧お盆の十六日で、天下はれての公休日ださうだ。

このように、沖縄出身者の集住地域では沖縄の伝統と習慣が維持され、そのひとつとして芸能も営まれていたのである。

さて、一時活動を停止していた県人会は、1931年2月に活動を再開する（沖縄県人会兵庫県本部 1982:51）。新たに県人会活動を担ったのは、先述したエリート層の人たちや1920年代に來阪して成功を収めた、集住地域のリーダーたちであった。そして本部—支部という構成は、同郷の会と居住地域ごとの県人会を主体とする19のグループの連合体へと再編された（富山 1990:165-166）。

やがて、1937年に日中戦争が勃発するや、戦争を遂行するための「国民精神総動員運動」が決定され、日本精神初揚・敬神思想発揚などの精神の運動と、銃後奉公献金・国債応募などの物的支援の運動が全国的規模で展開される（西原 1976:25）。また、併合した朝鮮や台湾においても徹底した同化政策や皇民化教育が施行される。

一方、沖縄では、廃藩置県以後存在した本土と文化を統制しようとする動きが活発化し、言葉、服装、姓名などの大和化、裸足の禁止、火葬の奨励など衛生問題の改善、ユタの取り締まりなどがおこなわれる（大城 1976:813-831）。こうした日常生活のあらゆる風習を取り締まる運動は「生活改善運動」と称され、県の学務部が学校や青年会を指導した（比嘉・霜多・新里 1962:30）。

これらの運動が、1930年代後半から1940年代にかけて、関西や南洋群島<sup>11)</sup>など沖縄出身者の出稼ぎ・移民先においても展開する。関西における生活改善運動について富山一郎は、「沖縄出身者におけるとらえどころのない、いわば流行のようなものであり、やや厳密に言えば、『日本人』であろうと努力する生活態度を沖縄出身者の間に流通した文化運動だった」とする（富山 1990:226）。つまり、「沖縄人」を払拭し「日本人」を志向する語りが流行したわけである。

例えば、1938年に大阪球陽新報社より発行された小冊子『球陽—百人百言集』には、「名士」<sup>12)</sup>と呼ばれる100名の沖縄出身者の履歴・紹介が収録されており、そのなかの「抱負を語る」という項目には、当時の沖縄出身者の風俗や習慣に関する意見・主張が語られている。そのなかの主なものを以下に列挙する<sup>13)</sup>。

- ・ 方言を慎んで貰いたい。
- ・ 言葉、習慣、趣味等を早く他県人並になり、見劣りせぬように務める事。
- ・ 沖縄型の風紀、特に方言使用を慎んで人格の完成に努めて貰いたい。
- ・ 首里那覇の人は特に方言で話し勝ちだが注意せねばならぬ。
- ・ 第一に方言は全廃して貰いたい。それから他府県人に沖縄の風紀を知らさぬこと。  
沖縄相撲、沖縄芝居等は絶対に止めて貰いたい。
- ・ 年寄りも兎も角四十歳以下の婦人は可及的速やかに琉装を廃して和服に改めて貰いたい。
- ・ 沖縄の年中行事はここではやらないこと。
- ・ 琉球舞踏、琉球角力、蛇皮線の撤廃（大阪に於て）。

- ・沖縄音楽を否定する者ではないが、市内大通りでのドンチャン騒ぎだけは止めて貰いたい。
- ・深夜まで三味を弾く事は止めて貰いたい。

生活改善運動では、沖縄方言での語らい、沖縄の服装の着用、沖縄の年中行事、沖縄芝居などがその槍玉に挙げられた。つまり沖縄出身者たちの内部には、日本文化への同化をめざし、沖縄習俗を押さえ込もうとした指導者層と、それに対して、沖縄習俗を拭い去ることができなかった一般労働者層という対立構造が生じたとみられる。ゆえに、ここに挙げた名士たちの語りからは、沖縄習俗に満ち満ちた一般労働者たちの日々の営みが看取されるのである。

### 3 芸能活動

本節では、前節で述べてきたような社会的状況のなかで展開された沖縄出身者の芸能活動の実態を主に大阪球陽新報社発行の『大阪球陽新報』及び、関西沖縄興信社発行の『関西沖縄興信名鑑』から拾ってみる。

『大阪球陽新報』は、1937年7月25日、大阪球陽新報社が沖縄出身者の「向上発展と生活改善をスローガンとして創刊」して以後、月二回の発行を続け、1941年2月10日（第73号）で廃刊となった県人会の機関紙である。大阪球陽新報社の主幹をつとめた真栄田勝郎はエリート層による一般の沖縄出身者の矯正指導を切望していた人物で、その意思が紙面にも反映されている（富山 1990：227）。したがって生活改善運動を主唱していたエリート層の人たちによる文章が数多くみられる。

『関西沖縄興信名鑑』は1935年、関西沖縄興信社が発行した興信録である。ここには124名の沖縄出身者の履歴紹介をはじめ、県人会や同郷の会などの諸団体、関西在住の沖縄出身者の住所、職業、出身地などが収録されている。

#### 3.1 普久原朝喜の活動

沖縄出身者たちが大阪に流入し集住地域の形成をはじめめる1920年代、芸能の普及に寄与する先駆的な活動をみせたのは普久原朝喜（1903～1981）であった。普久原朝喜は、1927年、大阪市西淀川区大和田町でマルフクレコードを設立している。マルフクレコードは、沖縄音楽を専門とする初めてのレコード会社で（高橋 2005：27）、曲目は古典、俗謡、歌劇、新民謡など多岐に及んだ。翌1928年には、沖縄出身者の海外移民先、とりわけ南米、ハワイを中心に輸出をはじめ<sup>14)</sup>、1931年以降はアメリカや南洋にまで販路を拡げている<sup>15)</sup>。1935年刊行の『関西沖縄興信名鑑』から普久原朝喜の条を引用しよう<sup>16)</sup>。

氏は中頭郡越來村字胡屋の出身、幼にして多芸に長じ、殊に三味線と情緒深き民謡の演奏は丸福印レコードが雄弁に物語る所であらう。今や関西の沖繩レコードは大半氏の吹込みに依るものと云ふても過言ではあるまい。殊に海外への進出も最近頓に活況を呈しつゝあるは慶賀に堪へない次第である。また夫人鉄子さんも好く氏を援けて吹込に活躍しつゝあるは稀に見る多芸の嫁と云へやう。最近野里町に店舗を拡張し益々繁栄をなせり

会社設立当初からレコードの売り上げは好調で、その制作活動も朝喜や当時の夫人鉄子らによって活発であつたらしい。

高橋美樹の整理によれば、戦前のマルフレコードの販売方法は大きく次の二つに分けられる。そのひとつは、「制作したレコードと蓄音機を自転車に積み、朝喜自ら沖繩出身者の家を訪問しながら販売する方法」であり、もうひとつは「レコード目録を作成し、注文をとって通信販売する方法」である(高橋 2006:71)。

後者について普久原朝喜自身の回想によれば、当時「神戸の春日井道や大正区、西成区などつぎつぎと取次店ができ」たという(普久原 1975:33)。事実、前掲『関西沖繩興信名鑑』の玉城義雄の条に「昭和三年来阪に現在の工場働き傍ら沖繩レコードの取次販売を副業として励んでゐる」とある<sup>17)</sup>。また沖繩レコードの取扱店を『大阪球陽新報』及び『関西沖繩興信名鑑』の広告からさがしてみると、大阪市大正区、西成区、此花区、和歌山市鷺の森に、あわせて四軒確認される<sup>18)</sup>。高橋によれば、取次店で注文を受け、普久原商会(マルフレコード)から発送する方法をとっていたという(高橋 2006:71)。このようにマルフレコードは、普久原が手の届く範囲だけでなく、各集住地域の取次店の媒介によって関西の沖繩出身者たちにより広く流通したのである。

### 3.2 古典音楽の稽古場の開設

沖繩出身者の集住地域には古典音楽の稽古場も開設された。『関西沖繩興信名鑑』から上間孫吉と又吉嘉昭の条をみよう。

そのうちのひとり、上間孫吉は1917年来阪して大阪市此花区四貫島で料理屋「敷島」を開業し、「沖繩古典楽野村流研究楽進会の教師として重きをなしてゐる」とある<sup>19)</sup>。一方、又吉嘉昭は、1931年来阪し、大阪市港区千代見町に在住し、織工業に従事していた。「氏は郷土音楽を究め、今や大家に伍し一般会員の懇望に依り野村流音楽研究共栄会<sup>20)</sup>創立するや教師として音楽教授をなしつつあり」と紹介されている<sup>21)</sup>。なお、この稽古場は、同郷の会や県人会などの諸団体を紹介した『関西沖繩興信名鑑』の「関西地方県人団体編」にも掲載されている<sup>22)</sup>。同郷の会や県人会の催し物等に招かれる機会が多かつたのであろうか。

それから、1939年11月に開催された大阪球陽新報社主催の公演「演劇と舞踊の夕」を報じた記事に「琉球音楽の大家又吉榮義氏並にその門下一同」が《かぎやで風節》などの古典音楽を演奏したとあることは、又吉榮義の稽古場があつたことを示唆している<sup>23)</sup>。さらに『関西沖繩興信名鑑』で彼の住所を調べてみたところ、前述した上間孫吉の隣であることが確認

される<sup>24)</sup>。両者には何らかの交流があったと推察される。又吉栄義は沖縄在住時、伊佐川世瑞(1872～1937)に師事している。伊差川世瑞は、1934年12月から1935年7月に日本コロムビア社からSPレコードを発売しているが、ここに収録されている曲目のほとんどは、伊差川世瑞と又吉栄義のふたりによって演奏されたものである<sup>25)</sup>。又吉栄義は伊差川世瑞の高弟であつたらしい(知名 2002:7)。

### 3.3 料亭での芸能活動

『大阪球陽新報』や『関西沖縄興信名鑑』の広告欄には、仲居が美人であることを謳い文句にした料亭の広告がいくつか散見されるが、そのなかには客のもてなしのため、沖縄の歌や踊りを披露したとおもわれる記述もみえる。一例として、此花区四貫島の「ときわ亭」という店の広告に「琴、三味線、舞踊達者ノ妓十数名揃フ」とある<sup>26)</sup>。

この店の所在地である此花区四貫島は、『関西沖縄興信名鑑』所収の「関西在住県人職業分布状態総覧」に「此花区は俗に四貫島方面にして、県人の料理店多く、南国情緒豊かな唯一の歓楽場なり。同区は自由労働者も多く日々の金回りもよきため彼らを相手に営業をなせり…」とあり<sup>27)</sup>、また大阪沖縄県人会連合会の記念誌『雄飛—大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会40周年記念誌』にも「昭和七、八年頃から、現在の梅香町あたりに沖縄系の料亭が立ち並び、その数は二十数件を数えるに至った」とある(大阪沖縄県人会連合会1987:75)。この地区は沖縄出身者が経営する料亭・料理店が集中していた歓楽街であつたらしい。

この他、尼崎方面にも料亭がみられ、南国レコードで古典音楽や民謡の吹き込みをおこなった戀の花カメという歌い手が、尼崎大門の「南月亭」という店で、その宣伝盤試聴会を開いている<sup>28)</sup>。

### 3.4 沖縄芝居と組踊の上演

沖縄芝居は、金城南邦が1939年10月に歌舞伎上演場の小屋であつた此花区の戎座の権利譲渡を受け、「関西唯一の郷土芝居上演場」として年中無休で営業されるようになってから活気を帯びるようになった<sup>29)</sup>。

伊集亀千代、野村安信、比嘉良順などの俳優が在籍した平良良勝の一座は、三か月にも及ぶ南洋での興行のあと来阪し、1939年10月21日から23日まで戎座での興行をおこなっている<sup>30)</sup>。これを報じた記事の見出しが「久し振の沖縄芝居」であることは、以前にも興行があつたことを示唆している。この一座は関西に約一ヶ月滞在し、大正区の大正橋通相生席<sup>31)</sup>、尼崎の杭瀬座や堺市の八花館<sup>32)</sup>で興行をおこない大成功をおさめたという。11月末に一度は沖縄に戻つた一座であつたが、伊集亀千代、野村安信、比嘉良順が12月に再度来阪して24、25日に港区の市岡会館で「返り旗上興行」をおこない<sup>33)</sup>、翌1940年の2月10日から14日にかけての「お名残興行」を最後に再び沖縄に引き揚げた<sup>34)</sup>。

戎座ではその後、那覇市の大正劇場から引っ越してきた真楽座が7月1日より興行をおこない<sup>35)</sup>、9月1日には、真楽座から分離した若手の一座が旗揚げした<sup>36)</sup>。この一座は、「常識で判断できないほどの大当り」となり、翌1941年の1月1日から5日までの正月公演では、1日3回公演をおこなっている<sup>37)</sup>。人気を支えたのは、大宜見小太郎、儀保盛良などの若手俳優の活躍であったという<sup>38)</sup>。『大阪球陽新報』の沖縄芝居の興行を報じた記事には、「沖縄人は芝居がお好き」「沖縄人は芝居狂」などの見出しが躍り、どれも大盛況が報じられている。

こうした那覇市の沖縄芝居の一座による盛んな関西興行は、那覇市の人口と関西在住の沖縄出身者の数との比較によって説明することができる。1940年の統計によれば、那覇市の人口は65208人<sup>39)</sup>であったが、それに対して大阪には42252人、兵庫には11426人<sup>40)</sup>であり、あわせて5万人以上もの沖縄出身者が在住していた。つまり、当時の那覇市の人口に匹敵する規模の沖縄出身者が関西になだれ込んだことによって、沖縄芝居の興行が成立したのである。

さて、こうした沖縄芝居の興行を、生活改善運動を主唱していたエリート層の人たちはどう感じていたのであろうか。例えば、『大阪球陽新報』第28号(1938年10月15日)の「映画と演劇掻き集め帖 沖縄演劇の向上せぬ原因は何か」という記事には、「沖縄の観衆はまだこんな低級な芝居しか楽しめない程趣味が低いのだらうか、恐らくソレを楽しむのは極く一部の無学のお婆さん達であらう、さうでなければ教養ある現代の青年子女等が可愛いさうである、興行者がこんな頭であるから沖縄の演劇は三十年経つても進歩しないのだ」と、沖縄芝居一般への批判が書かれている。

また1939年11月14日には、大阪球陽新報社の主催で「演劇と舞踊の夕」が開催されている<sup>41)</sup>。演目は、又吉栄義一門による《かぎやで風節》などの古典音楽、平良良勝の一座による組踊「執心鐘入」、舞踊などであった。観客は、エリート層の人たちをはじめとする「郷土の古典音楽を味はおうとする熱心なひとばかり」で、「野卑な口笛や低劣な野次を飛ばす者もなく、終始静肅に見物し、ほかの芝居小屋で演じた時とは到底比較にならない一種上品な雰囲気」が漂っていたという。終演後に寄せられた「関西球陽会」のメンバーによる「感想談」には、「沖縄の芝居もハンドウ小とか奥山の牡丹とか低級な歌劇は止めて斯ういふ良心的なものを上演すると発展する筈だが…」とみえる。つまり、エリート層の人たちのなかには古典音楽や組踊を静肅に鑑賞することは「上品」であり、沖縄芝居は「低級」とあるとの評価が存在していたのである。

さらに『大阪球陽新報』の主幹であった真栄田勝郎の著書『琉球芝居物語』には、大阪での沖縄芝居について次のような発言がある<sup>42)</sup>。

…とにかく大阪のような大都会で三つも琉球芝居を興行し、出し物といえば伊江島ハンドー小とか何々ロマンスといったような低級な歌劇が主で、狂言も膝までしか届かない芭蕉着に縄の帯を締めた扮装の田舎臭いものばかりだった。郷里で観るならこういう芝居でもまだ辛抱できたが、大都会の真ん中で沖縄語でそういう芝居を演じる彼らの心臓

の強さにあきれた。私は観ている自分の顔が赤くなるほど恥ずかしい思いをしたのである。大都会での興行は東京の沖縄芸能保存会がやっているような方針で、古典劇と代表的舞踊に限ってもらいたい。

ここにも、沖縄芝居には「低級」という評価がみえるが、組踊や古典舞踊には対照的な態度をとっている。沖縄芝居は、王府のもとで育まれた古典音楽や古典舞踊、組踊などは序列をつけられ、卑下されたのである。

#### 4 指導者と大衆のせめぎあいのなかで

本稿では、関西圏における沖縄出身者社会の政治経済的動向と、それに規定されながら営まれた沖縄出身者の芸能活動とを、両大戦間期に絞ってみてきた。

この時期をとおして、沖縄出身者集団の内部では、集住地域での芸能の営みをめぐってイデオロギーの衝突があった。すなわちそれは、反差別運動から生活改善運動に至り、集住地域におけるあらゆる沖縄習俗を押さえ込もうとした指導者層と、それに対して、沖縄習俗を拭い去ることができなかった一般労働者層とのせめぎあいである。

ただし、指導者層が槍玉に挙げていたのは芸能一般ではなく、集住地域における「毛遊び」「市内大通りでのドンチャン騒ぎ」「深夜まで三味を弾く事」「沖縄芝居」などの営みであった。つまり、『勤勉』の対概念である『遊惰』（富山 1990:235）の払拭をめざしたのであり、とりわけ古典音楽や古典舞踊、組踊りなど士族的脈絡をもった諸分野はここに含まれなかった。これは、昭和11（1936）年に東京で開催された「琉球古典芸能大会」に端を発する、琉球芸能における「古典」概念の形成・普及とも考え合わせられるべきである<sup>43</sup>。

一方、こうした内なるまなざしのなかで展開された一般労働者たちの芸能活動は、その人口量の拡大と相関関係にあった。その象徴的な出来事として、大阪における沖縄出身者の数が1千人から1万8千人に増加した1920年から1930年にかけて、普久原朝喜がレコード制作・販売を開始し、さらに4万人以上にまで膨張した1940年前後には、沖縄芝居の常打ちが成立している。とどのつまり、人口量の拡大が芸能を質的に変化させたのである。ただ、こうした一般労働者たちの芸能活動は、差別や同化圧力への抵抗としての営みではなかった。それは大阪の労働市場において最下層におかれながらも、したたかに生き抜いた一般労働者たちの身体性を具象化したものであったのだ。

このように、沖縄のそとにつくりだされた近代的空間での沖縄出身者の芸能の営みは、沖縄芸能史における近世から近代への連続性を考えてゆくうえで、我々に多くの示唆を提示している。

[注]

- 1) 佐谷功、1943「琉球と八重山」『日本民族舞踊の研究』（佐谷功編）東宝書店：4-5。大阪商船の沖縄航路を利用した事実については、橋本与志夫、1997『日劇レビュー史——日劇ダンシングチーム栄光の50年』三一書房：53。
- 2) Fischer, C.S, 1975 "Toward a Subcultural Theory of Urbanism, Urbanism," *American Journal of Sociology*, 80 (=奥田道大・広田康夫編訳、1983「アーバニズムの下位文化理論へ向けて」『都市の理論のために』多賀出版：50-94)。
- 3) 大阪沖縄県人会連合会、1997『雄飛——大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会50周年記念誌』：59。
- 4) 安仁屋政昭、1974「県外移民と県内移住」『沖縄県史第7巻 移民』沖縄教育委員会：431。
- 5) 安仁屋政昭、1974「県外移民と県内移住」『沖縄県史第7巻 移民』沖縄教育委員会：441。
- 6) 福地曠昭、1985『沖縄女工哀史』那覇出版社：75-150。
- 7) 『同胞』1925年5月20日（第7号）、1頁。
- 8) 『同胞』1925年7月25日（第8号）、3頁。
- 9) 『同胞』第7号、3頁。
- 10) 大阪都市協会編、1983『大正区史』大正区制施行五十周年事業委員会：22-26。
- 11) 南洋群島における沖縄出身者の生活改善運動については、富山一郎「ナショナリズム・モダニズム・コロニアリズム」『日本社会と移民』明石書店、1996年：145-151に詳しい。
- 12) 富山一郎の分析によれば、「名士」と呼ばれる人たちはエリート層ならびに集住地域のリーダーたちであった。
- 13) 大阪球陽新報社、1938『球陽——百人百言集』：5-67。
- 14) 有銘政夫編、1993年『普久原朝喜顕彰碑建立記念誌 チコンキ——ふくぼる』：96。
- 15) ビセカツ、1980「普久原朝喜小史」LP『朝喜・京子の世界』（FFG-23）。
- 16) 関西沖縄興信社、1935『関西沖縄興信名鑑』：164。
- 17) 関西沖縄興信社、1935『関西沖縄興信名鑑』：186。
- 18) 『大阪球陽新報』1938年8月1日（第23号）、9頁より3軒、『関西沖縄興信名鑑』94、95頁の間の広告欄より1軒確認できる。
- 19) 関西沖縄興信社、1935『関西沖縄興信名鑑』：156。
- 20) 「野村流音楽研究吉栄会」の誤りであると思われる。
- 21) 関西沖縄興信社、1935『関西沖縄興信名鑑』：160。又吉嘉昭の活動については、青い海大阪支社編集部、1980「関西琉球古典音楽の50年を遡る」『青い海』91：66-67に詳しい。
- 22) 関西沖縄興信社、1935『関西沖縄興信名鑑』：198。
- 23) 『大阪球陽新報』1939年12月1日（第51号）、3頁。又吉栄義の活動については青い海大阪支社編集部、1980『青い海』91：65-66に詳しい。
- 24) 関西沖縄興信社、1935『関西沖縄興信名鑑』：27。
- 25) 『伊差川世瑞』マルフレコード、1984年（CCF-1001）。
- 26) 『大阪球陽新報』1937年9月1日（第3号）、5頁広告欄。
- 27) 関西沖縄興信社、1935『関西沖縄興信名鑑』：17。
- 28) 『大阪球陽新報』1939年8月20日（第44号）、7頁。
- 29) 『大阪球陽新報』1941年1月15日（第72号）、2頁。
- 30) 『大阪球陽新報』1939年10月15日（第48号）、2頁。
- 31) 『大阪球陽新報』1939年11月1日（第49号）、3頁。
- 32) 『大阪球陽新報』1939年11月15日（第50号）、3頁。
- 33) 『大阪球陽新報』1940年1月1日（第52号）、7頁。

- 34) 『大阪球陽新報』1940年2月1日(第54号)、1頁。  
 35) 『大阪球陽新報』1940年6月20日(第61号)、3頁。  
 36) 『大阪球陽新報』1940年9月15日(第66号)、3頁。  
 37) 『大阪球陽新報』1941年2月10日(第73号)、3頁。  
 38) 『大阪球陽新報』1941年2月10日(第73号)、3頁。  
 39) 国勢調査、『那覇市統計書』平成18年度版、2007、那覇市経営企画部経営企画室統計グループ：28。  
 40) 国勢調査、「労働力の流出」『リーディングズ労働市場論——沖縄を中心に』沖縄労働経済研究所、1990：170。  
 41) 『大阪球陽新報』1939年12月1日(第51号)、3頁。  
 42) 真栄田勝郎、1981『琉球芝居物語』青磁社：158-159。  
 43) 久万田晋、2008「琉球芸能における『古典』概念の形成——昭和11年の琉球古典芸能大会をめぐる——」『沖縄における身体の近代化——御冠船踊りの受容をめぐる』(板谷徹編)平成17-19年度科学研究費補助金(基盤研究B)研究成果報告書、沖縄県立芸術大学：1-18。

[参考文献]

- 青い海大阪文社編集部、1980「関西琉球古典音楽の50年を遡る」『青い海』91：64-69。  
 安仁屋政昭、1974「県外移民と県内移住」『沖縄県史第7巻 移民』沖縄教育委員会：423-458。  
 ———、1977「移民と出稼ぎ——その背景」『近代沖縄の歴史と民衆』(沖縄歴史研究会編)至言社：145-165。  
 有銘政夫編、1993『普久原朝喜顕彰碑建立記念誌 チコンキーふくばる』中根章(私家版)。  
 石原昌家1982「沖縄人出稼ぎ移住者の生活史とアイデンティティの確立」『沖縄国際大学文学部紀要社会科学編』10-1：63-68。  
 ———、1996「沖縄出稼者と定住——異文化接触と同化過程」『ライフ・ヒストリーを学ぶ人のために』世界思想社：31-61。  
 浦崎康華、1977『逆流の中で-近代沖縄社会運動史』沖縄タイムス社。  
 大宜味小太郎、1976『小太郎の語やびらうちなあ芝居』青い海出版社。  
 大阪沖縄県人会連合会、1987『雄飛——大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会40周年記念誌』。  
 ———、1997『雄飛——大阪の沖縄 大阪沖縄県人会連合会50周年記念誌』。  
 大阪都市協会編、1983『大正区史』大正区制施行五十周年事業委員会。  
 大城立裕、1977「文化の統制と対応」『沖縄県史第1巻 通史』沖縄県教育委員会：813-838。  
 沖縄県人会兵庫県本部、1982『ここに榕樹あり 沖縄県人会兵庫県本部35年史』。  
 金子マーティン、1984「紡績工業における被差別部落婦人労働試論」『部落解放研究』40：44-67。  
 喜屋武臣市、1988「『一般』の県外就職——出稼ぎ労働者を中心に」『沖縄県労働力の県外移動に関する調査研究報告書——経済自立に向けて労働市場の役割を探る』73-89、沖縄労働経済研究所。  
 ———、1992「地域間労働移動の一考察——沖縄からの出稼ぎ労働者を中心に」『経済と社会』9：27-40。  
 佐谷功編、1943『日本民族舞踊の研究』東宝書店。  
 杉原薫・玉井金五編、1986『大正・大阪・スラム』新評論。  
 ステイーブン・ラブソン、2007「在関西のウチナナンチュ——本土社会における歴史と差別・偏見体験」『琉球弧・重なりあう歴史認識』(吉成直樹編)森話社：261-290。  
 高橋美樹、2005『沖縄のポピュラー音楽史における伝統と創造——知名定男の音楽活動を事例として』沖縄県立芸術大学博士学位論文。  
 ———、2006「沖縄音楽レコード制作における(媒介者)としての普久原朝喜——1920-40年代・九福レコードの実践を通じて」『ポピュラー音楽研究』10：58-79。  
 知名定男、2002「関西音楽史」『urma(うるま)』47：7。

- 富永斉、1995『沖縄経済論』ひるぎ社。
- 富山一郎、1990『近代日本社会と「沖縄人」』日本経済評論社。
- 、1996「ナショナリズム・モダニズム・コロニアリズム」『日本社会と移民』（伊豫谷登士翁・杉原達編）明石書店：129-163。
- 仲間恵子、1999「一九二〇・三十年代における在阪沖縄人の生活意識」『大阪人権博物館紀要』3：55-110。
- 仲本登編、1994『脈48号』脈発行所。
- 納富香織、2001「在本土沖縄県人紙について——『大阪球陽新報』『球陽新報』『内報』『自由沖縄』目録』『史料編集室紀要』26：153-204。
- 西原文雄、1976「昭和十年代の沖縄における文化統制」『沖縄史料編集室紀要』創刊号：25-46。
- 橋本与志夫、1997『日劇レビュー史——日劇ダンシングチーム栄光の50年』三一書房。
- 比嘉春潮・霜多正次・新里恵二、1962『沖縄』岩波書店。
- 比嘉道子、1986「沖縄の紡績女工（一）——その実像を求めて」『名護博物館紀要 あじまあ』2：105-117。
- 、2004「関西の沖縄人—大阪市大正区沖縄県人会を中心に」『名護博物館紀要 あじまあ』12：70-94。
- 福地曠昭、1985『沖縄女工哀史』那覇出版社。
- 普久原朝喜、1975「マルフク50年——琉球民謡とともに」『青い海』43：31-33。
- 堀田暁生、2002「大正区の近代」『ヒストリア』181：52-69。
- 真栄田勝郎、1981『琉球芝居物語』青磁社。
- 水内俊雄編、2000『大阪・アジア・沖縄』大阪市立大学：43。
- 宮脇 幸夫、1997「関西における沖縄出身者同郷組織の成立と展開」『人間科学論集』28：81-107。
- 向井清史、1990「労働力の流出」『リーディングズ労働市場論——沖縄を中心に』沖縄労働経済研究所：159-180。
- 、1992「ソテツ地獄」『新琉球史——近代・現代編』琉球新報社：191-213。

大阪市立大学大学院研究生

くりやま しんや